

水利構造物の調査研究

・佐陀川視察報告（その1）

西田修三

天明7年（1787年）に清原太兵衛によって開削された佐陀川は、その完成により、宍道湖の水位が下がり、二百ヘクタールの新田が開発された。この佐陀川は昭和になって道路交通が発達するまでは、舟運により幹線交通の手段として繁栄していた。このように農業水利、水害対策、内海航路として大きな役割を果たしてきたが、現在はあまり注目されない状況にある。佐陀川は**宍道湖の環境**に対しても大きな影響をおよぼす要因を持っている。一方、松江市は「めぐりの道づくり」の施策として佐陀川遊覧船の運行を計画している。このように佐陀川の果たす役割はまだ大きいものがあり、**歴史的な功績を検証しながら、佐陀川の活用方法、宍道湖の環境保全**について学びたいと考えている。以下、視察についての報告を行う。

1. 日 時 ; 平成22年11月6日（土）13時～17時
2. 視察順路 ; はくちょう号第2乗船場～佐陀神社～鹿島町古浦～第2乗船場
3. 参加者 ; 四方田穆、大畑温憲、井上正一、山村賢治、寺田彰憲、木佐幸佳、石田弘至、吉田 薫、大掛敏博、西田修三（計10名）
4. 講師 ; 松江歴史館 宍道正年専門官



写真3 - 1 参加者の皆さん

5. 視察内容の要旨
 - 1) 佐陀川開削の要因
3年続きの洪水、清原太兵衛の熱意、家老三谷権太夫の助力、藩財政の好転、印旛沼の干拓事業
 - 2) 清原太兵衛の功績
上申すること12回にして、認可されたときには年齢が75歳（1785年）、2年半の大事業で竣工したときには77歳（1788年）になっていた。

3) 事業の概要

宍道湖にそそぐ河口を拡張し、潟の内（旧佐太の水海）から旧佐陀川に沿って開削し、佐陀村本郷から日本海にそそいでいる忠太夫川をとりいれて掘割でつなぎ、宍道湖の水を日本海へ放流するものである。

規模は、川幅 20 間（約 36m） 全長 2 里余（約 8km）である

労働力は、藩命により出雲 10 郡から延べ 7 万人を動員した。

開削した用地は、無償収用であった。

難工事箇所は、潟の内、舟木、鷓灘、江角の 4 箇所、犠牲者は 3 名である。

4) 事業の効果

洪水対策；かなりの緩和はあったが、根本的解決にはならず。

潟の内を中心に水田の拡大（約 200 ヘクタール）

佐陀川を利用した水運による経済効果



写真 3 - 2 潟の内付近の情景



写真 3 - 3 佐陀神社付近の情景



図 3 - 1 佐陀川開削のルート

6 . 今後の活動計画

歴史的な水利構造物に焦点を当てた調査研究を行い、先人の遺徳をしのぶとともに、現在、未来にも相通じる技術的な検証を行いたい。(今後の予定項目は、意宇川の川違え、千本ダム、荒島新田開発、出雲荒木浜の開拓など)

以上